

# 論文

ゼッキーノ・ドーロ（イタリアの

子供の歌のコンテスト）

—22年の歩み その(1)—

前 川 滋 子

1. 序
2. 目的
3. 第11回までの優勝曲と主な入賞曲
4. アントニアーノについて
5. 名称の由来
6. コンテストの方法
7. コンテストを支える人々
8. ゼッキーノ・ドーロの歌の特色
9. ゼッキーノ・ドーロの特色
10. ゼッキーノ・ドーロから学んだこと
11. 評価
12. 結び

## 1. 序

子供たちに、あたらしい感覚の、すぐれた歌を与えたいという願いから、1959年、イタリアで一つの催しが始められた。子供の歌のコンテスト、ゼッキーノ・ドーロ (Zecchino d'Oro) である。爾来、それは年一回ずつやすむことなく続けられて、昨年(1979年)22回を終了した。その間、イタリアばかりでなく、世界中の子供たちに愛唱された子供の歌の名曲を、多数世に送り出して来た。子供たちによい歌を与えたいと願う教育家や音楽家にとって、ゼッキーノ・ドーロの歩んで来た道には数多くの教訓が残されていることと思う。今日の複雑な社会状況と多様な文化現象の中で、子供の歌について考えるために、それ等の教訓を集め検討することは、非常に意義あることと考えて、今回このテーマをとり上げてみたのである。

ゼッキーノ・ドーロは、ミラノ市でその第一歩を踏み出したが、本格的な歩みを始めたのは、第3回目、その運営の一切を、ボローニアのアカデミア・アントニアーノ (Accademia Antoniano di Bologna後述) に委ねてからのことである。<sup>(2)</sup>その後、回を重ねる毎に、コンテストの形式もとのい、催しの規模が大きくなって行った。第18回からは、ユニセフ (UNICEF) の協力を得るようになって、形式も期日も変化したのであるが、今回は、紙数の関係で、内容的に最も充実した第11回までの経過を辿りながら、その独自の歩みを眺めてみたいと思う。

## 2. 目 的

「なぜ、ゼッキーノ・ドーロは行われるか」「子供たちが、よい歌を欲しているから」この問答ではじまるアントニアーノ (ゼッキーノ・ドーロの主催者、後述) のレポートによると、<sup>(1)</sup>ゼッキーノ・ドーロの目的はつぎのようなものである。子供の発育がはやくなるにつれて、子守り歌や童謡に親しむ時期は短くなり、彼等の興味は急速にポピュラー音楽、流行歌へとひろまった。しかし、それ等の音楽の多くは、あきらかに子供たちにとって有害で

ある。子供たちを害のある音楽から遠ざけるだけではなく、彼等の口と心と時間とを、とくに彼等のために作られた歌、こだわりのない心と巧妙な手によって、彼等の人間形成に役立つように作られた歌によって充たすこと、<sup>(1)</sup>すなわち、健全な歌を通じて人間形成に貢献するという意図を、実際的な手段を以て積極的にすすめて行くことが、その目的である。

現実に即した新しい歌とは、具体的にどのような方向をめざしているのだろうか。それは、歌のリズムとテキストの面に、顕著にあらわれている。すなわち、

- a. ポピュラー音楽、流行歌のリズムをとり上げること。
- b. 日常生活に密着した題材や、その時期話題となった事象（宇宙旅行・UFOなど）をとり上げること。
- c. 以上の目的達成のために、ポピュラー音楽の分野で活躍中の芸術家たちに、協力を求めること。
- d. 子供を審査員に加えること。

などである。

### 3. 第1回から第11回までの優勝曲と主な入賞曲<sup>(3)</sup>

これらの曲のうちには、NHKの「みんなの歌」に採用されているものがある。㊦印でそれを示す。<sup>(7)</sup>

第1回 1959年10月 応募総数20<sup>(2)</sup>

優勝曲 クワルテット (Quartetto)

入賞曲 ピノッキオへの手紙 (Lettera a Pinocchio)

第2回 1960年10月 応募総数40

優勝曲 おとぎ話 (Fiaba)

第3回 1961年10月 応募総数80

優勝曲 お星さま (Le stelle)

第4回 1962年3月 応募総数216

優勝曲 赤いジャケツ (La giacca rotta)

第5回 1963年3月 応募総数306

優勝曲 ママ ごめんなさい (Non lo faccio piu) ㊦

第6回 1964年3月 応募総数285

優勝曲 ヒヨコのバレリーノ (Il Pulcino ballerino)

第7回 1965年3月 応募総数457

優勝曲 おじいさんのボロ車 (Dagli una spinta)

入賞曲 ピエロのトランペット (La tronba del pagliaccio) ㊦

チビッコ・カウボーイ (Tom-tritin-Tom) ㊦

第8回 1966年3月 応募総数527

優勝曲 西部の兄弟 (I fratelli del far west)

入賞曲 ジロマジトンド・ジロトンド (Extramusicale-giromagitondo)  
㊦

がちょうのおばさん (L'orchetta Gersomina) ㊦

第9回 1967年3月 応募総数500

優勝曲 シベリアのポポフ (Popoff)

第10回 1968年3月 応募総数400

優勝曲 44匹の猫 (Quarantaquattro gatti) ㊦

入賞曲 闘牛士カモミツロ (Il trero Camomillo) ㊦

第11回 1969年3月 応募総数427

優勝曲 ヒッピーうさぎのティッピー (Tippy, il coniglielli)

入賞曲 黒猫のタンゴ (Volevo un gatto nero)

最優秀テキスト賞 ペンナ ダルジェント (Penna d' argento)

第7回 糸の上のセラフィーノ (Serafino l'uomo sul filo)

第8回 口の中の指 (Il dito in bocca)

第9回 三つのしずく (Tre goccioline)

第10回 チンチンガチャン (Tinta e ghiri)

第11回 白い雲と黒い雲 (La nuvola bianca e nuvola nera)

#### 4. アントニアーノについて

前述のように、ゼッキーノ・ドーロは、第3回以降アントニアーノの手で運営されている。アントニアーノは、ボローニアのフランシスコ派修道院によって、貧しい人々の救済、キリスト教文化の普及、青少年の教育文化面における指導を目的として設立された法人組織で、演劇、美術、音楽のアカデミーや、子供たちのコーラス、ピッコロ・コーロ (Piccolo Coro) が設けられている。子供たちに美しくたのしい歌を与えるというゼッキーノ・ドーロの目的は、アントニアーノの目指すところと一致している<sup>(1)</sup>。しかも、公演の場合、公演に必要なスタッフもすべて、アントニアーノで提供することが出来る。ミラノ市でささやかな歩みをはじめたゼッキーノ・ドーロは、ここではじめて、適合した土壌に根をおろして成長して行くことになったのである<sup>(2)</sup>。

#### 5. 名称の由来

ピノッキオの物語の一頁から、ゼッキー・・ドーロの名称がうまれた。ゼッキーノ・ドーロとは、かつて地中海に覇をとなえた、ヴェネチア共和国の金貨の名称であるが、この催しを企画した人々は、金貨のことを思い浮べたわけではなかった<sup>(1)</sup>。子供たちの世界を表わすのにふさわしい題名を探し求めて、イタリアの子供たちにとって一番すばらしい本、「ピノッキオの冒険」に目を通した。そして、5枚の金貨のエピソード<sup>(9)</sup>に目をとめたのである。彼等が心に描いたものは——悪がしこい狐と猫にだまされたかわいそうなあやつり人形が、金貨を埋めた野原に水を注ぐと、奇蹟的に一枚の金貨が顔をのぞかせる——そのような情景であった。これこそ、ピノッキオの名前でイタリア中の子供たちに贈られる最高のおくりものに違いないのである。

#### 6. コンテストの方法

ここでまず、コンテストの方法について、説明したいと思う。

a. 曲の選出、その年のゼッキーノ・ドーロが終るとまもなく、次回のた

めの準備が始まる。主催者は、ひろく一般からの曲の公募に加えて、イタリア中の音楽家・詩人たちに応募規定を送り、作品を依頼する。「子供たちのために、よい歌を送って下さい。私たちは、その中からよいものを選び、それをイタリア中にひろめましょう」という手紙とともに。

応募には、二つの封筒が用意される。二枚の封筒の表には、共通のことば（モットーどんな言葉でもよい）が書いてある。一つの封筒には、楽譜が入り、もうひとつには、作者の名前と住所を書いた紙が入っている。名前入りの封筒は、誰の目にもふれないように、厳重に保管されて、審査の場には、無記名の楽譜だけが提出される。三回のオーディションを経て、入選曲がきまった時点ではじめて、曲の入った封筒と同じ言葉の書いてある封筒が探し出され、中に入っている紙片から、作者の名前があきらかになるのである。そのため、有名な作曲家の作品が落選したり、素人が、思いがけない幸運にめぐまれたりすることがある。

b. 審査員 審査委員会のメンバーであるが、専門の音楽家だけではなく、一般のテレビ視聴者を代表する人々で構成される。したがって、音楽家、教育評論家、新聞記者、家庭の主婦など、多彩な顔ぶれであるが、大人達に混って、10才の男女1名ずつが、メンバーに加えられる。彼等の投ずる一票は、大人のものと同じ重さを持っている。

c. 審査の方法 伴定は、歌の演奏をきいて行われる。そのため、テープやレコードの用意されていないものは、ピアノの演奏で録音される。採点の方法は、0点から10点まで、各審査員が口頭で発表し、平均点が5.5点以下のものは落選となる。<sup>(1)</sup>これが、第1回目のオーディションである。ただし、1回きくだけで採点するのは難しいので、すぐれた曲が選に洩れるのをふせぐため、審査員一人につき12曲ずつ、リコールする権利を与えられている。たとえ5点以下、0点の曲でも、もう一度ききなおすことが出来るわけである。このようにして、二回目のオーディションが終ると、応募曲の約半数を残すことになる。1、2回は採点発表が口頭で行われるが、3回目、最終選考は投票で行われる。得点を集計して、1位から30位までが入選となるが、

更にその中の上位12曲が、ゼッキーノ・ドーロに参加することになるのである。この時点ではじめて、作者の名前があきらかになる。歌の選考は困難な仕事であるが、審査員たちは、極めて慎重に忍耐強くこの仕事にとり組む。二人の子供の審査員も同様に努力して、大人と同じ重さを持つ一票を投ずる。

d. 歌手の選出 イタリア在住のすべての子供たちは、ゼッキーノ・ドーロへの参加資格を持つ。外国人でもさしつかえない。第13回には、日本人の男子が「から手」という曲を歌って入賞したこともある。

旅行による無用の出費をさけるために、予選は、イタリアの各地で行われる。その方法は、回を追うごとにととのって行ったのであるが、まず、ラ・レヴェル (La Rever)<sup>(2)</sup>という選考のチームが、アントニアーノの協力のもとに、イタリア各地をまわって予選会を開く。各地方の人々を聴衆として、ゼッキーノ・ドーロを模した楽しい催しを行うが、これは、子供たちをえらぶとともに、一般の人々にゼッキーノ・ドーロの性格、出演者の資格などを知らせるためのものでもある。これは、長い期間をかけて行われる。たとえば、1969年3月の大会のために、1968年8月に、この催しが行われた記録もある<sup>(2)</sup>。その他にもいくつかのオーディションが様々な主催者の手で行われる。日本の、たとえばNHKの行事などのように、系統化されていないのであるが、ゼッキーノ・ドーロに適した子供を選出するという点では、すぐれた実績をあげている。

選考基準は成文化されてはいないが、記録から判断するところでは、予選に於ては、

- (1) 言葉のイントネーションが正確であること。
- (2) リズム感がよいこと
- (3) 歌唱全体に安定感があること
- (4) テキストの内容をよく表現していること
- (5) 歌が上手なだけでなく、テレビの画面を通してよい印象を与えることなどの条件が、要求されているようである。

予選を通過した子供たちには、アントニアーノへ集まるよう、通知が送ら

れる。その手紙には、「ゼッキーノ・ドーロは子供のためのお祭りであるから、スターへのあこがれや、野心を持つことなく参加するように。」という言葉が明記されている。<sup>(2)</sup>第11回目を例にとると、約7万人の子供がオーディションを受け、3百人ほどが予選を通過した。その子供たちは、ボローニアのアントニアーノに集められて、二回目の選考を受けたのである。

予選を通過した子供たちは、また別の要素に基づいて、選考されることになる。すでに選ばれている歌の1つ1つの内容にふさわしいイメージを持った子供でなければならない。「三人の海賊(Tre corsari)」では、活発でおてんばな子供たち、三つのしずく (Tre goccioline)」では、やさしい三人の女の子、「シベリアのポポフ (Popoff)」では、日やけしたシチリア生まれの男の子のように<sup>(1)</sup>。ゼッキーノ・ドーロの歌は、日本の子供の歌にくらべて、テキストの内容に於て劇的な要素が強いように思われる。1つ1つの歌が小さなドラマであって、歌い手の子供は、そのドラマの主人公になったり、ナレーターをつとめたりする。いずれの場合も、それぞれの役柄にふさわしい個性と、たくまざる演技力を要求されるのではないかと思う。音楽とドラマの結びつき——そこに、オペラの国イタリアという印象を重ねるのは、考えすぎであろうか。

最終選考が終ると、合格した子供たちの名前が発表される。独唱者とはべつに小人数のコラス (コレット coretto) のメンバーもえらばれ、発表される。

ゼッキーノ・ドーロの始まる二週間位前から、出演者の子供たちは、保護者とともにボローニアに滞在する。そして、アントニアーノでマリエレ女史に歌を教えられ、ピッコロコーロやオーケストラとの協演で練習し、レコードの吹きこみをして、それらが終わったところで、いよいよ大会にのぞむことになるのである。

e' ゼッキーノ・ドーロの三日間 ゼッキーノ・ドーロは、毎年三月中旬頃の木金土の三日間、アントニアーノの会場で行われる。<sup>(3)</sup>

まず、前会の優勝者が開会を宣言する。<sup>(2)</sup>独唱の子供たちが入場し、ピッコ



ロ・コーロ、指揮者のマリエレ、司会のマーゴ、オーケストラの指揮者と楽員たち等、出演者が全員そろって開幕となる。ステージの側面に、階段状の席が設けられ、審査員の子供たちが並ぶ。人数は16人位である。

ゼッキーノ・ドーロの入賞曲は、毎年12曲である。第1日目に6曲が演奏される。1つの曲を、まず、小人数のコーラスに支えられながら、独唱の子供が歌う。(1人のときと、2、3人一緒のときとがある) つぎに、おなじ歌を、ピッコロ・コーロのメンバーだけで歌う。審査員の子供たちは、テキストを注意深く眺めながら同じ曲を二回ずつきき、そして得点を発表する。採点の方法は、子供たちの1人1人が、6から10までの番号のついた板(Paletta パレッタ)を掲げて表示する。全員の示した点数を合計したものが、その曲の点数となるのである。その方法をくり返して、第1日目6曲、第2日目6曲をきき、12曲の順位がきまる。第3日目は決勝の大会で上位8曲が演奏され、第1位の優勝曲が決定する。優勝曲の作曲家には、ゼッキーノ・ドーロをかたどったメダルがおくられる。独唱の子供たち全員に、人形とお菓子と出演したときの衣裳が賞品としておくられるが、賞金は与えられない。なお、歌のテキストで一番すぐれたものには、ラ・ペンナ・ダルジュント(La Penna d'Argento 銀のペン) 賞がおくられる。<sup>(2)</sup>

三日間にわたる大会の様子は、国営テレビでイタリア全土に中継されるが、第13回からは、最終日のみ、ユーロヴィジョンで、全ヨーロッパにむけ放映されるようになった。

f. 演出、舞台装置の工夫 ゼッキーノ・ドーロは、コンテストというより、子供のためのたのしい歌祭りとなるよう、さまざまな工夫がこらされている。例えば、1つ1つの歌の内容にあわせて、かわいいあやつり人形がつくられる。独唱の子供たちは、それぞれ歌の内容にあわせてデザインされた衣裳をつけて歌う。また、1回ごとに、全体を通したテーマが設定され、それにしたがって、演出がおこなわれるのである。第1回目のテーマはピノッキオであった。大会第1日目は「火くい親方」<sup>(9)</sup>の午後(Pomeriggio di mangiafuoco) 第2日目は「ふしぎの野原の午後(Pomeriggio del campo

dei miracoli)」第三日目は「狐と猫の午後 (Pomeriggio della volpe e del gatto) とよばれた。狐と猫に扮した俳優が、金貨の形のメダルを野原から掘り出す場面を演じ、優勝曲の作曲家におくった。審査員の子供たちは、「かたつむり達ともの言うコオロギたち (Lumachine e Grilli Parlanti)」と呼ばれた。また、乗り物がテーマになって、出演する子供たちが、おもちゃの汽車に乗って登場したり、海上都市というテーマで、白い帆をふくらませた船で一杯の港の風景をバックに、子供たちが、船に乗って登場したこともあった。<sup>(2)</sup> しかも、1つの歌が登場するたびに、背景や照明にもすこしずつ変化を与えて、歌にあわせた、たのしい雰囲気を作っていくのである。

## 7. コンテストを支える人々

つぎに、このユニークな催しを支える主要な人物について、述べてみたいと思う。

### a. マーゴ (Mago Zurli) とマリエレ (Marielle Ventre)

二人の人物なしに、ゼッキーノ・ドーロは成立しない、と言っても過言ではない。ゼッキーノ・ドーロが今日まで続いて来たのは、この二人の、たぐいまれな才能と、この催しによせる熱意に負うところが多いのである。

マーゴの役割りは、審査員の1人として、歌と歌手の選考に参加するほか、当日の司会をつとめることである。当日、独特の魔法使いの衣裳に身を包んで、出演者の子供たちと語り、はげまし、子供たちをあっと驚かせる工夫をまじえながら、会場の雰囲気をもり上げて行く。彼は、そのために、前以て出演者の1人1人を観察し、歌の内容を分析し、当日の計画をたてる。台詞、おくりもの、催し全体をドラマとした時の筋書き、録音や効果、オーケストラの分野まで、すべての点に彼のアイデアがいかにされているのである。多くの子供たちが信じているように「マーゴは、ゼッキーノ・ドーロをつくっている」のである。<sup>(1)</sup>

彼はミラノ市の出身で、カトリックの大学を卒業し、ミラノのピッコロ座の演劇学校にも通って、マイムの俳優として注目されるようになった。テレ

ピの子供番組で活躍し、ゼッキーノ・ドーロには、その第1回から参加して、その催しの代表的人物になった。大会の進行中、舞台の袖で一息ついた時の彼の表情には、大会の雰囲気とはまるで違うきびしさがあらわれているという<sup>(1)</sup>。彼が、この催しに全力を傾けている様子をうかがわせるようなエピソードである。

マリエレは、子供たちにとって年長の姉、たよりになる母親のような存在である。彼女の役割りは、審査員として、歌と歌手の選考、独唱者とピッコロ・コーロの歌の指導、入賞曲のレコーディング、大会でのコーラスの指揮、出演者たちの監督などである。

大会で、子供たちは、マリエレの物言う手にみちびかれてせい一杯歌うのであるが、<sup>(2)</sup>それまでが大変である。イタリア各地から集められた子供たちは、3才から10才ぐらいまでで、境遇も、言葉づかいも、まちまちである。ピッコロ・コーロの子供たちも含めて半数以上の子供が、楽譜はおろか字もよめないのである。<sup>(1)</sup>歌の楽譜を眺めてみると、三連音符が多用されていたりして、幼い子供にはむづかしい曲もあるが、アントニアノのレポートを読むと、マリエレが、恰度母鳥が口うつしでヒナに餌を与えるように、子供たちに歌を教えている様子が想像される。まだ口のまわらないような幼い子供が、実に見事にリズムに乗ってうたっているのをきくと、その子供の素質のよさもさることながら、マリエレの、教師として、音楽家としての能力をたかく評価したいと思うのである。彼女は、子供たちに、遊びをまじえながら、忍耐強く歌を教える。歌の意味を説明し、歌の性格を理解させる。言葉のイントネーションを正しくすることも大切である。舞台上で笑顔をみせるように、注意することもある。<sup>(2)</sup>歌の内容にあわせて、かわいいあやつり人形をデザインすることもある。マイクをこわがる子、急に歯がぬけて、発音に支障をきたす子、そして、全員がインフルエンザにかかってしまうなどということもある。<sup>(2)</sup>大会が終るまで、マリエレは、気の休まる時がないようである。

彼女は、ボローニアの出身で、教員と指揮者とピアニストとしての資格を持ち、ピッコロ・コーロの指導者でもある。彼女は結婚もせず、ピッコロ・

コーロとゼッキーノ・ドーロのために、その生活のすべてを捧げているようである。まさに、ゼッキーノ・ドーロの象徴的存在である。

b. 子供たち ゼッキーノ・ドーロは、子供たちの楽しい歌祭りであるから、主役はもちろん子供たちである。独唱者たち、ピッコロ・コーロ、審査員たち、そして聴衆の子供たち、それぞれが、このコンテストを支える大切な役を受持っている。独唱者についてはすでにふれているので重複はさけるが、彼等は1人で歌う場合(黒猫のタンゴ, *Volevo un gatto nero*)と、2,3人で歌う場合(西部の兄弟, *I fratelli del far west*)とがある。彼等は、子供たちの人気者となり、大人たちからは羨望の目をむけられる。しかし、入賞者は衣裳と人形とお菓子を受けるだけで、賞金は与えられない。また、ゼッキーノ・ドーロが終わった後、他の主催者による他の催しに出演することは禁じられている。次回以後のゼッキーノ・ドーロへの参加もいとめられない。ゼッキーノ・ドーロが終わった時、彼等はまた「ふつうの子供」にもどるのである。<sup>(1)</sup>そして、成人してからはさまざまな職業につき、健全な市民としての生活を送るわけである。ゼッキーノ・ドーロは、決して幼いスターへの登竜門ではない。むしろ、その様な形で子供が商品となることを、極度におそれているようである。その催しの楽しい思い出が、すべてなのだという考え方である。

なお、ゼッキーノ・ドーロが終るまで、子供たちは、本名でなく、出場する歌の題名で呼ばれる。例えば、「ヒヨコのバレリーノさん」とか、「ペンギンのベルサリオさん」というように。

c. ピッコロ・コーロ、アントニアーノ付属の児童合唱団で、3才から14才位までの子供約80名で構成されている。ゼッキーノ・ドーロでは、独唱者の子供を助けて、大切な役割りをはたしている。独唱者が雰囲気におされてあがってしまい、充分力を出し切れないことのないよう、支えるのである。また、独唱者の衣裳やアレンジの仕方によって、曲の印象が左右され易いので、おなじ曲を、ピッコロ・コーロがもう一度歌うことによって、曲同士の条件を等しくし、評価を容易にするのである。その上、かわいらしいコーラ

スが加わることで、子供たちの歌祭りの気分をもうり上げることに、大いに役立っている。

ピッコロ・コーロは、1960年、アカデミア・アントニアーノに設立された。それまで、ボローニアでの様々な行事の度に、コーラスの子供たちが集められていたが、やがて、それを恒久的なグループにすることとなり、アントニアーノに付属させた。マリエレが、その指導者にえらばれた。1966年から、マーゴの提案で、ピッコロ・コーロはゼッキーノ・ドーロに出演することになった。ゼッキーノ・ドーロが有名になるにつれて、このコーラスも人気をあつめ、入団希望の手紙がたえずよせられるという。コーラスのレパートリーは広く、古い民謡から子供の歌、宗教曲にまで及んでいる。ピッコロ・コーロは、アントニアーノの年中行事に参加するほか、レコードのふきこみ、テレビ出演など、スケジュールが一杯である。1966年以来、幾度かヴァチカンに招かれて、ローマ法王の前で演奏し、称讃の言葉をうけている<sup>(1)</sup>

d. 審査員たち ゼッキーノ・ドーロの審査員の子供たちは、ボローニアの小学校の4・5年生、16名である。ゼッキーノ・ドーロには、大人の審査員ももちろん参加するが、子供たちの判定は、大人たちの表示する結果と、ふしぎによく一致と言う。

e. 作詞、作曲家 ゼッキーノ・ドーロは、ポピュラー音楽のよい面をとり入れることを目的としているので、サン・レモの音楽祭などで活躍している芸術家たちが、作品をよせている。<sup>(3)</sup>例えば、

作詞 マリオ パンゼリ (Mario Panseri)

ピノッキオへの手紙、1959ゼッキーノ・ドーロ

(Lettera a Pinocchio)

コメ プリマ1958, 雨1969 サンレモ音楽祭

(Come prima, Pioggia)

作詞 アルベルト テスタ (Alberto Testa)

口の中の指1966, ゼッキーノ・ドーロ

(Dito in bocca) La penna d'argento賞

クアンド クアンド クアンド 1962サン・レモ音楽祭

(Quando, quando, quando)

作曲 ルチアーノ ベレッタ (Luciano Beretta)

ミルクの星 1962ゼッキノー ドーロ (La stella di latta)

タンゴ・イタリアーノ 1962サン・レモ音楽祭

(Tango italiano)

作曲 カヴァラーロ (Claudio Cavallaro)

チャオ ナポレオン 1969ゼッキノー・ドーロ

(Ciao Napoleone)

永遠 (Eterna) 1971サン・レモ音楽祭

など、人気のある芸術家たちが、協力している。また、常連と言える人々も目につく。とくに、フランコ マレスカ (Franco Maresca作詞) と、マリオ・パガーノ (Mario Pagano作曲) のコンビは、ナポリ音楽祭でも活躍したが、ゼッキノー・ドーロでは、第11回までに11曲の入賞をはたしている。主なものでは、

赤いジャケツ (La giacca rotta 1963)

ヒヨコのバレリーノ (Il pulcino ballerino 1964)

闘牛士カモミツロ (Il trero Camomillo 1969)

などがある。なおマレスカは、空前のヒット曲となった「黒猫のタンゴ」の作詞家でもある。もっとも、決して有名人ばかりではなく、教師、医師、公務員、主婦などの作品もあって、大勢の人々の力によってこの催しが支えられていることがわかるのである。

その他、編曲とオーケストラの指揮に当るマルテッリ (Giordano Bruno Martelli) をはじめ、演出、舞台装置、衣裳、そして医師まで、ゼッキノー・ドーロを支える人々は大勢である。

## 8. ゼッキノー・ドーロの歌の特色

「山道を歩いていたら、母子で声をそろえて歌うのをきいた。それは、アン

トニアーノの歌（ゼッキーノ・ドーロの入賞曲のこと）であった』かつて、ゼッキーノ・ドーロを手伝われたことのあるイタリア人の神父が、うれしそうに語っておられた言葉を思い出す。

ゼッキーノ・ドーロの歌は、一見むづかしそうでいて、実に親しみ易く、おぼえやすいのが特色である。その親しみやすさの依って来るところは、やはり、ポピュラー音楽のよいところをとり入れていることであろう。例えば、リズムの面では、

タンゴ（黒猫のタンゴ）

フォックス トロット（電話の指のために Per un ditino nel telefono）

チャチャチャ（月の歌 La canzone della luna）

シェイク（ヒッピーうさぎのティッピー Tippy, il coniglietto）

そして、ポピュラー音楽とは限らないが、

マーチ（ペンギンのベリサリオ Il Pingiuno Belisario）

ジロドンド（Girotondo輪になる）踊り、

（ジロマジトンド・ジロトンド Extramusicale-giromagitondo）

ゆるやかなワルツ（赤ちゃんになる時 Quando e l' ora di fare la  
nanna）

など、さまざまな種類がとり上げられている<sup>(2)(7)</sup>また、ゆるやかなテンポのストローファ（Strofa）と、はいりトルネッロ（Ritornello）のくみ合わせによる<sup>(4)(5)</sup>カンツォーネ風の曲も多い。

44匹のねこ（Quarantaquattro gutti）

メロディを眺めてみると、同じ音型のくり返しが多く<sup>(4)(5)</sup> 覚えやすいのである。ただ、幼児を対象とすると、音域が広いような気がする。<sup>(12)</sup> N H K の「こどものうた」にも、かなり音域がひろく、むずかしいもののが取り上げられているが、音域は、 $c^1 - d^2$  ぐらいで<sup>(8)</sup> ある。ゼッキーノ・ドーロでは、 $e^2$  に達するものも時々みられる。<sup>(4)(5)</sup> またストローファの部分に三連音符を多用した歌（西部の兄弟 I fratelli del far west）などは、口づてに教えることで、幼児にむずかしさを感じさせず、うたわせることが出来るのである

う。

和音構成は単純で、ほとんど関係調への転調にとどまっている。なお、戦後作られた日本の子供の歌には、伴奏が大切な役割りを果たしているものが多い。伴奏が美しく演奏されることで、はじめて美しい歌の曲となるのであるが、ゼッキーノ・ドー口の歌は、無伴奏で口ずさんでもよく、伴奏の重要性はそれほど感じられない。この点でも、親しみやすいのである。

歌のテキストは、劇的な要素が強いように思われる。内容の面白さが、子供の心をひきつけるのである。例えば、

「シベリアのポポフ (Popoff)<sup>(5)</sup>では、チビで太ったコサック兵ポポフが、勇敢な仲間をさしおいて、雪の上をころがりながら、ドン河へと進んで行く。勇士の物語ならぬひとひねりした面白さは、やはり、ポピュラー音楽の一つの傾向を追ったものであろう。また、「三つのしずく (Tre goccioline) は、波のしずくと雨のしずくと露が主人公である。青い水をたたえた入江に停泊する海賊たち、色あざやかな虹や金色にひかるお星さまの姿をうつしながら、手をつないで踊るしずくたち、太陽に消されても、またすぐもどって来て踊るしずくたちの物語である。<sup>(5)</sup>その他、指しゃぶりをふせぐおまじないの歌、「口の中の指」(Il dito in bocca), それから、少々頭のおかしい科学者、フィリップおじさんが主人公の「月の歌」(La canzone della luna) では、チャチャチャのリズムに乗って、プレチピテヴォリシメヴォルメンテ (precipetevolissimevolmente) (あたふたと) という言葉が、面白くくり返されている。

優勝曲になるのは、テンポがはやく、はなやかな印象を与えるものが多いが、いわゆるヒット曲となるのは、第1位にえらばれたものより、むしろ入賞曲で、しかも、人気のある作曲家のものが多いようである。

## 9. ゼッキーノ・ドー口の特徴

ゼッキーノ・ドー口は、まことにユニークな歌祭りである。とくに

### a. 審査員に子供を加える



b. 入賞者に賞金を与えない

c. テレビ・ラジオを充分に利用しながら、テレビ・ラジオに利用されることをさける

d. 競争意識が表面に出てくることを、極力おさえている

以上の点が注目される。これは、何よりも、カトリック教会という精神的にも財政的にも安定した後援者をもっているため、そして、アントニアーノの人々の犠牲的精神によって支えられているためと考え、単純に讃美の言葉だけですまされることではないのであるが、しかし、この催し全体をつつむ家庭的なやさしさには、心をうたれるものがある。子供たちにとって本当にたのしいお祭りとなるよう、関係者達が努力している様子は、<sup>(1)(2)</sup> 恰度、子供のためのパーティにあれこれと心をくばる母親の姿を思わせる。彼等の子供たちに対する姿勢は、子供とおなじ背丈になるように、しゃがんだり腰をおろしたりして、子供たちの目を見つめ、話す言葉に耳をかたむけている、そのようなものである。親として教育者として、一番基本的な姿勢を保っている人々に支えられ、家庭的なあたたかさを持った催しであるというところが、ゼッキーノ・ドーロの最大の特徴であろうと思う。

## 10. ゼッキーノ・ドーロから学んだもの

幼児にとって、歌うことがいかにたのしいものか、あらためて感じさせられた。歌には、子供の心をひきつける要素が、実に数多く含まれていることを教えられたのである。歌を通じて、言葉の正しい発音をまなび、美しいものへの情感を養うばかりでなく、正しいリズム感を育てる上でも、歌は最上の手段であることを認識させられた。

マリエレ・ヴェントレと子供たちとの交流は、いわば、家庭における母と子の関係の延長線上にあるように感じられるが、幼児の音楽教育の過程において、母から子への伝承という形式の意義を、あらためて意識させられた感がある。アントニアーノのレポートを読むと、<sup>(1)</sup> すべての教育家の理想とするところは、母親が子供に対して持っている 権威とやさしさに代るものを身

につけることだと書かれているが、ゼッキーノ・ドーロは、まさしく、母と子との関係、そこで行われる伝承の形を理想化し、公共の場にもたらしただけのものと言えるであろう。まさに音楽教育の原点がどこにあるか、教えられたような気がするのである。

## 11. 評 価

ゼッキーノ・ドーロは、美しい子供の歌を数多く世に道り出して来た。幼児の音楽の世界に貴重な宝を加えた功績は、たかく評価されてよいであろう。そして、アントニアーノの人々が信じているように、ゼッキーノ・ドーロの歌をきいて育った子供たちが、心の中に、真の平和と晴朗な美しさを抱きながら成人となることも、夢物語りとばかりは考えられないのである。

ただ、商業主義から子供を隔離する姿勢は、現在の社会状況の下では、催し自体が孤立する危険をまねきやすいこともたしかである。現に、テレビでくり返し放映される日本製アニメーションの主題歌に押されて、ゼッキーノ・ドーロの歌は影がうすくなりつつあるという声がかかるのも、孤立への不安を抱かせる材料となっている。

なお、年1回の行事で、しかも、イタリア全土を対象としているものであるから、その年の子供の歌の傾向を知る上で、大いに役立つものと思われる。ポピュラー音楽とつながりはあっても、流行歌ほどに短い周期で変化するものではないが、この催しが回を重ねて行くならば、幼児の音楽教育の分野に貴重な資料を提供するものとなることを、信じて疑わないものである。

## 12. 結 び

今回は、第11回までのアウトラインを辿って、ゼッキーノ・ドーロの、いわば陽の当る部分だけをみつめて来た感がある。12回以後、70年代に入って、イタリアの国情が暗さときびしさを増す中で、ゼッキーノ・ドーロは、あらたな困難に直面したのではないだろうか。前述の孤立化への問題をも含めて、次回には、またちがった角度から、このテーマをとり上げてみた

いと思う。

終りに、貴重な資料を多数お送り下さったアントニアーノのロッシ神父、資料とともに直接ご親切にご指導いただいた、ヴォルカン神父、タルチジオ神父、カリシモ神父、キングレコードの河合秀朋氏に、深い感謝の意を表するものである。

(まえかわ しげこ 幼児教育科 講師、音楽理論)

#### 参 考 文 献

- (1) Fernando Rossi : Lo Zecchino d'Oro Festa della canzone per bambini  
Storia, personaggi, canzoni (1968)
- (2) Berardo Rossi : Notiziario dell'Antoniano (1959, 1960, 1961, 1962, 1963,  
1964, 1965, 1966, 1967, 1968, 1969)
- (3) 河合秀朋 : カンツォーネの歴史 (1976) キングレコード G X F 31-35
- (4) Antoniano : 8° Zecchino d'Oro (1966)
- (5) Antoniano : 9° Zecchino d'Oro (1967)  
Cervino Edizioni musicali-Milano
- (6) N H K みんなの歌 (1976)
- (7) N H K みんなの歌楽譜集  
6 卷(1966) 7 卷(1967) 8 卷(1968) 10 卷(1970) 11 卷(1970)
- (8) N H K こどものうた楽譜集  
第 1 卷(1967) 第 2 集(1969) 第 3 集(1967) 第 4 集(1968) 第 5 集(1968)
- (9) C. コルローディ・安藤美紀夫訳 (1978)

ピノッキオのぼうけん 福音館書店 p.170-171

(10) マリア・モンテッソーリ・鼓常良訳

子どもの発見 (1978年), p.20-30 国土社

(11) Maria Montessori : Formazione dell' uomo (1970) Garzanti

(12) 国安愛子：幼児の音楽教育，音楽教育の展望，音楽教育学会編 (1979) 11章  
p.20-30 音楽之友社